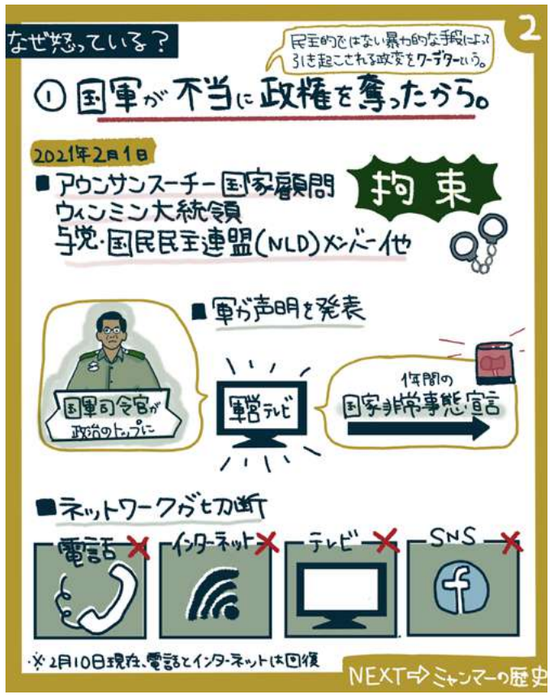
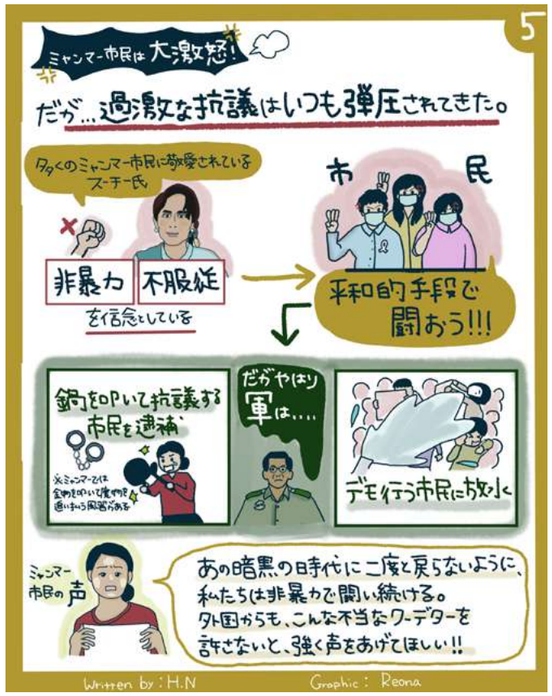
生きるとは分かち合うこと、弱き者と

PHD LETTER

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD LETTER
Volume
146
2021.3
公益財団法人 PHD協会
2021年度 会報146号





Nishi = 作　Reona = 画

人々が掲げる3本指のポーズは「抵抗」を意味する。

表紙写真 / 在日ミャンマー人抗議集会（3 月 7 日みなとのもり公園にて）

ミャンマー（ビルマ）軍事クーデターに対する声明文

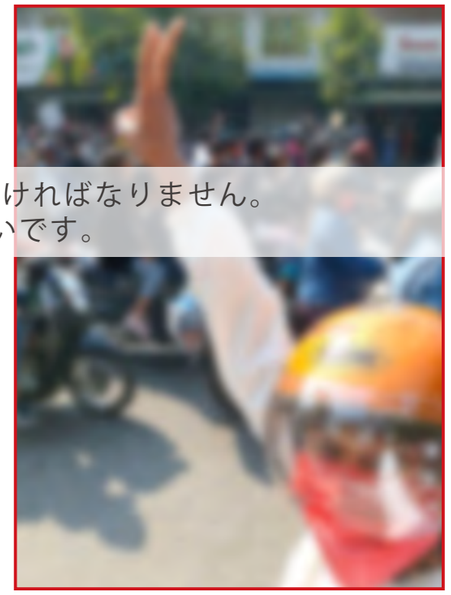
公益財団法人ＰＨＤ協会は、ミャンマー国軍による軍事クーデターに断固反対します。
そして、民主化を求めるミャンマーの人たちに寄り添い、連帯していくことを表明します。

2021年3月30日　公益財団法人ＰＨＤ協会

PHD 元研修生たちの今「ミャンマー」

山本　健太郎＝文

コロナ禍で一変したミャンマー元研修生たちの生活。そして、突如勃発した国軍によるクーデターと市民への激しい弾圧。辛さや悲しみに暮れる日々の中、「今できること」をそれぞれの形で実践する彼女たちの声と想いを届けます。（軍によるネット遮断やその他規制により、一部の元研修生たちとの連絡に留まりました。）



ＰＨＤの皆さん、こんにちは。お元気ですか？今ミャンマーは、ほんとに大変なことになっています。「どうして」とか「なんで」とかよく思います。毎日辛いし、悲しいです。ほんとは今は未来がない。クーデターが始まって今は20日目です。でも私にはそれが20年間にも感じます（2021年2月20日時点）。皆、心も体も疲れています。ミャンマーは国が貧しいけど、みんな心持ちです。大変けど、人々はできることを毎日頑張っています。

私は今、夜も安心して眠れない。いつ軍に捕まえられるかわからないから、自分の家で寝ることもできないです。でも、私がやらないと誰がしますか。だから辛くても村のみんなに言い続けています。**「諦めないで、頑張りましょう」**と。

日本にいるみなさんにまた会いたい、会って一緒に笑ったり、冗談とかも言いたい。そんな未来、来るのかなあって、、、いつかその日が来ると信じたいです。

みなさんへ、今ミャンマーで起きていることをできるだけ日本の人たち、世界の人たちに伝えてほしいです。私たちのメッセージを届けてください。私たちはそれが嬉しいです。よろしくお願いします。

元研修生たちの今「ミャンマー」

いつか私たちが勝つと信じてるから。
軍政に負けるわけにはいきません。

皆さん、こんにちは。ミャンマーは今、とても危ないです。軍人が政権を乗っ取って、スーチーさんと他の人たちも捕まってしまいました。軍人や軍警察は罪のない人たちを銃や暴力で傷つけています。本来、彼らはミャンマー国民を守るためにいるのに、今は彼らが国民を攻撃します。今は誰も守ってくれない。国民は自分たちで身を守らなければならない。軍がコントロールする限り、法律も意味がない。私たちは、村でもマンダレーでも、軍に抗議するために毎日デモ活動を頑張っています。今日も、明日も、明後日も。

今は毎日が心配で気持ちも楽にならない。早く前の生活に戻りたい。ミャンマーには、コロナの問題があって、今は軍の問題があります。国民も自由に仕事できないから、お金もなくて、食べるものもなくなる。そしたら、泥棒や悪いことをする人もふえる。もっと悪い国になるかもしれない。状況が良くないから先の事もわからない。私も家の仕事や勉強が手に付かない。安心して眠れないし、心も体も疲れます。

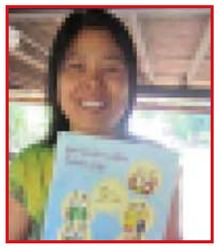
ミャンマーにいたくないという気持ちも出てくる。でも、いくらそんなことを言ってもしょうがない。ほんとは怖いけど、民主主義を取り戻すために闘い続けるしかない。ミャンマーの未来、子ども達の未来がかかっているから。ミャンマーの人たちが毎日国のために命がけで闘っていることを皆さんの周りにも伝えてほしいです。よろしくお願いします。

もし投票に不正があったというのなら、
今ここにきて私たちの真の姿を見てください。

こんにちは。今、私はとても心が痛いです。もう病気になります。未来のことは何も考えられない。子どもたちの教育とか生活はこれからどうなりますか。

私の村には、国民民主連盟（ＮＬＤ）をサポートする人は少ないです。ほとんどの人は国軍（ＵＳＤＰ）を応援します。みんなは何もしようとしない。だから私は一人ですし、寂しいです。村の人たちに対しても気が短くなります。マンダレーの街でデモに参加するときは、タダインシェ村のモーママさんたちと一緒に行きます。

軍は昨年11月の選挙で不正があったと言っています。でもね、それは違います。私たちの真の姿、声を聞いてみて下さい。



写真：2012 年タイ・ミャンマーツアーにて訪問時

元研修生たちの今「ミャンマー」

今は人のUnity（団結）が本当に大事だから。
未来のために。

皆さん、こんにちは。今ミャンマーでは、コロナと軍のコントロールという大きな問題があります。私も2020年3月に日本から帰ってから先生の仕事ができませんでした。悲しみや涙にくれることもありますが、今の自分にできることは何かなと考え始めると少しだけ勇気や希望も持てます。

研修生のときも心や体が弱くなるときもありましたけど、最後まで諦めずに頑張りました。今もその時の気持ちを覚えています。たしかに軍は怖いけどデモ活動にも僧院学校の先生たちと参加しています。私たちの未来のために頑張ります。

日々是東奔西走

研修担当
山本健太郎

来（きた）る日の再会まで
～煌めく スーチーさんの言葉～

2021年2月1日、忘れがたき一日。突如ミャンマーで強行された軍事クーデター。国家の分断、そして軍政に後戻りするかもしれないというミャンマー国民の不安や心の痛みは計り知れない。しかし、絶望や恐怖の最中、彼らは毎日のように抗議デモに繰り出し、この苦境に立ち向かっている。

中でも、元研修生であり、大切な友でもあるモーママさんの涙ながらの訴えは忘れられない。「私はね、自分が死んでもいいじゃないか、と思っている。今はそれくらいの気持ちがある。私の命をデモにあげてミャンマーが変わる力になるなら。きっと他の人たちも同じ気持ちと思いますよ。」勿論、失っていい命などあるわけない。ただ、彼女の頑なな覚悟、そして張り詰めた想いに触れ、私は暫し返す言葉を失った。

国家顧問アウン・サン・スーチーさんは、記事や対談で度々こう語っている。「国民ひとりひとりが自らの心を恐怖から解き放ち、自由を求めない限り、国を変えられない。民主主義は人に頼らず、自ら勝ち取るもの。大切なのは、何事も恐れない“勇気”です。その“勇気”を人々から引き出すことこそが、私自身の役割です。」

真のリーダーによって紡ぎ出された言葉は重く、胸に深く突き刺さる。今、スーチーさんの揺るぎない意志は確実に民へと乗り移り、連帯を生んでいる。少なくとも、ミャンマーの人たちには、国の未来のために自らを捧げる“勇気”がある。きっと皆がこの暗闇の先に光ある明日が来ると信じているからだろう。

ならば、私たちも立ち止まるわけにはいかない。ミャンマー国軍の非道は許さない。言葉だけでなく、行動で「寄り添い」を示していく。研修生たちが心穏やかな日々を取り戻せるまで。そして、信じている。来る日に笑顔で再会できると。

日本語で支援を訴える日本語学校の学生

懸命な思いに あなたの声を

内田 愛

元 PHD 協会ビルマ語通訳ボランティア。大阪外国語大学（現：大阪大学）ビルマ語科卒。在ミャンマー日本大使館草の根委嘱員を経てフリーランスの通訳・翻訳。2014 年２月からヤンゴン在住。

押し寄せる不安と蘇る恐怖

２月１日。フードデリバリーで自転車に乗っているヤンゴンの若い配達員たちがまず異変に気付きました。朝食の時間帯にいつもなら幾つも飛び込んでくる注文を入手できなかったからです。電話が繋がらずインターネットで情報も入ってこない中、何かがおかしいという疑念から、少しずつ情報が共有されてくるにつれ、本当にクーデターが起こったのだ、もう未来は無い、という絶望が人々の心を覆いました。バゴー管区で事業を営むミャンマー人の友人が私に語りました。「今の事業はどうなる？子供の将来は・・・？様々な不安がぐるぐると頭の中を巡り、真っ暗な気持ちになる。クーデターは私達の人生を一夜にしてひっくり返し、子供達の未来を踏み潰した。」

ミャンマーの人々は、いずれ鎮圧にやってくるであろう陸軍と自分達の力の差が圧倒的なものであることを、初めからわかっています。88年の武力鎮圧が再び繰り返されるかもしれないという恐ろしい予測を胸に、しかしその恐怖に囚われてしまうことを最も怖れて、非暴力の抗議デモや出勤ボイコット運動（CDM＝不服従運動）に立ち上がっているのです。それは、「軍事独裁は容認できない」と声をあげ続けていなければ、既成事実化してしまうからに他なりません。世論に、海外の人々の目に、耳に、今ミャンマーで起こっている真実とミャンマーの人々の真の望みを諦めることなく届け続けることしかできないのです。

実力行使を前にして

２月28日現在、抗議デモは連続24日目を迎え長期化が予想される中、活動は様々な形に展開しています。陸軍が市街警備を始める前の早朝だけを狙って抗議デモに行く若者、市民が築いたバリケード傍で負傷者の痛みを和らげようと待機する麻酔医、死傷者を搬送する救護ボランティア、SNSで市民の被害状況や安全な避難場所などを即時に知らせるキーボードファイターと呼ばれる情報共有役、無収入となるCDM参加者を支援する為、資金繰りに奔走する88年世代の人、炎天下での参加者に水や菓子を差し入れる人々、生活の糧を得る為CDMに参加できない事を悔しく思いつつ、3本指サイン＊で共闘の意思を示す沿道の露天商達・・・。ミャンマーの抗議デモの裏には、何倍もの数の人々のそれぞれの人生が詰まっています。

＊香港の民主化運動やタイの反軍政運動に倣って、反軍事クーデターの意思表示に人差し指・中指・薬指を真っ直ぐに立てて示す事が、ミャンマーの抗議活動でも行なわれています。元々は米国映画で仲間を弔うサインでしたが、アジア民主化運動で抵抗の象徴として使われ始めたもの。

日本の皆様へ

日本でも非暴力の抗議活動の行く末を心配する声が高まっています。しかし、ミャンマーと関わりがあり、ミャンマーに好意や親近感を抱いてくださっている方々が、事態を悲観しすぎたり自分の無力さを嘆いたりする必要は決してありません。それは日本人の非常に優れた共感性であり、他者を思いやる美徳、何かしなければならないという責任感の表れでありますが、ミャンマー人は決して悲観ばかりしていません。それは、絶望的な状況においても非暴力の抗議活動に「一日だけでも」と参加する人々が後を絶たないことからも窺い知ることができます。ぜひ、そんなミャンマーの国民に寄り添ってあげてください。「負けるな、ミャンマー市民！」「私達はミャンマー国民と共にあります」（英語では We are standing with Myanmar citizens！）などと声を掛けてあげてください。ツイッターでもフェイスブックでも、何でも構わないのです。特定の人に向けてでなくても大丈夫です。日本語のままでも大丈夫です！！

あなたの短いけれどもあたたかい、心からの声援が、どれだけ絶望的な状況でも闘いを続けるミャンマー国民の一人ひとりを励まし、「私はひとりじゃない」と感じさせてくれることでしょう。

市民の祈りを書いたポストイット（港湾局の壁）

民家のフェンスに貼られた反軍事クーデターのポスター

フードデリバリー員もズボンにスリーフィンガー

「恐れるな…頭脳で革命を」フレーダン中心部横断幕

スリーフィンガーの抗議デモ参加女性

炎天下でバナナを差し入れる支援者

沿道でデモ行進に声援を送る薬局店員

ミャンマーの警官隊、治安部隊、国軍兵士の皆さん

現在、ミャンマー国民の多くが、アウン・サン・スー・チー国家顧問の解放を求めています。民主的な選挙の結果が尊重されなかった事に、心を痛めています。これから経済が停滞してしまい、最貧国に戻ってしまう事を、とても不安に思っています。

どうか、国民とともに歩んでください。

２ヶ月間、あなた方が出勤しなければ、新しい暫定政権といえども、機能する事はできません。あなた方なしでは、彼は何もできないのです。

あなた方は、孤独ではありません。多くの公務員が、農業省の役人が、教育省の教員達が、保健省の医師や看護婦達が、あなた方とともに歩みます。多くの街の人々もです。

彼らも、職を捨てる覚悟で、ミャンマー国民とともに歩む為、勤務を止めています。

それには、安定した生活や、将来を犠牲にしなければならないのだと、あなた方の立場を国民は理解しています。

決して、ミャンマー国民は忘れないでしょう

あなた方が、独裁者に背を向けて、国民とともに歩み始めてくれた日の事を。

通りにあふれる抗議デモ参加者

REPORT

山本　健太郎 =文

ミャンマー　スラム・パター生活支援プロジェクト

「マンダレー中心部のスラム街で生活に困窮する人々（約120世帯 800人）を対象に、生活支援事業を実施しました。（2020年12月開始）」

コロナ禍のスラム・パター

世界的なコロナ大流行と時を同じく、苦境に見舞われたミャンマー。特に昨年8月以降、ラカイン州シットウェでの感染拡大を皮切りに、首都ネピドー、都市部のヤンゴンやマンダレーにも広がりを見せ、人々は自宅待機や勤務停止、外部からの入域規制強化など強力な規制の下での生活を余儀なくされました。

第2の都市マンダレー近郊に広がるスラム・パターには、正確なデータはないものの、劣悪な衛生環境の中で約3,000世帯、15,000～20,000人が密集して暮らしていると言われます。中でも子どもたちは過酷な状況に置かれ、貧しさゆえにゴミ収集や建設現場での労働を強いられ、学校に通えない子も多いです。また、住民の栄養状態も悪く、また不衛生かつ危険な仕事に従事するためケガや病気も多いです。加えて、保健衛生に関する知識不足、手洗い用の水やマスク、消毒液等の資源不足のため、感染症対策は十分ではありません。

次期研修生
トゥートゥーウェイさん

当会の次期研修生トゥートゥーウェイさんは、パターにある施設（DIC：ドロップインセンター）で先生として働いています。DICは生活が貧しい、親がいない又は障害のある子ども達にとって大切な就学の場でもあります。彼女はこの地域の子どもたちにビルマ語や算数、英語を教えるほか、生活指導やケアなどソーシャルワーカーとして地域に根差し、ひとりひとりに寄り添いながら活動してきました。PHDも2016年よりDICにおける子どもたちの教育事業をサポートしています。

コロナ禍での1年、パターでは生活に困窮する人たちが溢れました。住民の多くは、これまで日雇いやゴミ収集、商店街の小売りなどで生計を立てています。コロナ失業で現金収入が途絶えた世帯は、飢餓のリスクに見舞われました。そんな矢先、現地のトゥートゥーウェイさんからも悲痛な声が届きました。

現地からの叫び

「スラムの人たちの生活は今大変です。みなさん仕事もないし、食べるものがありません。だからDICの生徒たちは他の人の家に入ってお金や食べものを取ったりしています。

今はそのくらい大変です。私はそれを見てとても悲しい。でも、子ども達やその家族のために何もできない。力もお金もない。ただ、パターの人たちを助けたいだけなのに。」

パターの厳しい実情、そして、それを乗り越えたいというトゥートゥーウェイさんの溢れる思いが、私たちの胸に響きました。この苦境を打開すべく、PHDミャンマーとも協議し、パター困窮世帯への生活支援事業を企画することを決めました。

問題は何をどう進めるか。トゥートゥーウェイさんに加え、PHDミャンマーのリーダーであるモーママさん（2013年度研修生）と現地のニーズ、活動の内容と進め方、スケジュール、対象者等について対話と協議、調整を重ねました。

スラム・パター　生活支援プロジェクト概要

【事業内容 / 実施時期】

食糧配給：困窮世帯への食糧及び衛生用品の配給活動

（2020 年 12 月初旬～ 2021 年 1 月末）
約　306,000　円
※コロナ禍での 3 密を避けるため、
配給世帯を 4 つのグループに分けて、
異なる日程で実施しました。

［配給セット（1 世帯 1 セット）］
・米　25kg・豆　3kg・油　2kg・塩　1kg
・マスク　1 箱・かぜ薬　1 パック（10 錠）

啓発活動：新型コロナウイルス感染予防のための対策を指導

（予定：2021 年 2 月初旬～）
約　75,000　円

手洗いやマスク着用等の感染予防対策について説明と指導を行う。住民が COVID-19 感染予防のための正しい知識を身に着けることを目標とする。

対象者

約 120 世帯・約 840 人

スラム・パター中心部に住む世帯のうち、右記の要件で選定した困窮世帯。

- コロナ禍により失業
- 土地を所有していない（家賃負担がある）
- 7 人以上の世帯（多子世帯）
- 貯金がない世帯
- 日雇い労働世帯（定職なし世帯）
- 児童労働に従事している子ども（7 ～ 18 歳）のいる世帯

※このプロジェクトは、公益財団法人かめのり財団の助成を受託して実施しました。

草の根の助け合い

プロジェクト開始は昨年12月初旬。食糧配給は、買い出し、仕分け、運搬をモーママさん、トゥートゥーウェイさんが中心に管理し、サンティダさん（2015年度研修生）、マーチョさん（2016年度研修生）も積極的にサポートしてくれました。

研修生たちは力を合わせ、今年1月末までに対象世帯へ全食糧を配り終えることができました。パターの人々の生活は少し楽になり、皆笑顔が溢れたそうです。何より飢餓の危機に苦しむ人々が最低限の栄養を摂取でき、命が繋がったこと、それ以上の安堵や喜びはありません。

パターの人々からも次のような言葉が寄せられました。

「本当にありがとうございます。このサポートをもらって、しばらくは家族や子どもに食べさせることができます。助かりました。」

「仕事もなくて、食べるものもなくて、もうダメかと思っていました。このサポートのおかげで、明日も子どもの笑顔を見ることができます。」

コロナ感染というリスクも隣り合わせだった中、見事に役割を全うした研修生たち。食糧配給を通じて、苦境でこそ必要な草の根の助け合いを彼女たちが教えてくれました。

2021.02.01

そして、2月に入り、感染拡大防止の啓発活動に移ろうとしていた矢先、国軍クーデターが勃発。先の見えない中、現地の研修生たちやパターの住民たちは不安や恐怖に怯える日々を送っています。

マンダレー街中も市民のデモと軍の圧力がぶつかり、混沌とした状態です。

当プロジェクトもストップし、今後どう進むのかは現状未定です。何より今は研修生たちの心身の安全安心が最優先です。彼らへの「寄り添い」という基本姿勢をもって、現地の状況を見ながら今後の方向性を決めていきたいと思います。

PHD Movement vol.29

ビルマとＰＨＤ協会の歩み

キーボードファイター　坂西卓郎＝文

～分かち合い実践録～

研修生招聘の休止を決めた会議の後、元研修生集合写真（2011 年）

ビルマとの出会い

ＰＨＤ協会とビルマの最初の接点は1988年8月、故草地総主事による現地調査である。まさに前回の軍事クーデターが勃発し、現在も民主化運動の象徴となっている8888運動が起こった時だ。その際の出張報告のまとめには「政治経済が混乱の極みに達しており、現時点で即断することは困難である。時間をかけ接触を続け1～2年後にはビルマの農民を招きたいと強く考えた」とある。

そして実際に研修生招聘が実現したのは4年後の1992年、ビルマ研修生第一号としてティン・アン・ウィンさんが来日した。獣医であり、農業の指導者でもあった。当時の農業指導者吉田吉彦さんはウィンさんを次のように評した。「感想を述べるまでもない、西郷さん、二宮金次郎のような立派な方でびっくり。日本人が忘れている心を持つ人。ウィンさんから教えられたことの方がはるかに多い」。ここからビルマの人たちとの歩みが始まった。

軍事政権下の研修生招聘

翌93年にはタダインシェ村からトゥンティンさん、ムームーさんという村のリーダー2名を同時に招聘した。トゥンティンさんも博識で思慮深い農業者、ムームーさんはＹＭＣＡの保育士として活躍、村の人たちの尊敬を集める二人だった。

続いて94年のトゥントゥンさん、96年のカインソーさんを招聘、その後は少し期間が空いたが、2002年にスウェインさんを招聘した後は09年のザーナウンさんまで毎年招聘を続けた。当時は日本での交流会でも「軍政のスパイがいるかも」と怯えて政治についてのコメントを避ける研修生もいたし、毎年東京のミャンマー大使館に訪問しインタビューという名の尋問を受ける必要があり、泣いて出てくる研修生もいた。軍政の支配は海を渡っても消えず、研修生たちの心を縛っていた。当時、軍政という長く暗いトンネルの終わりは全く見えなかった。

研修生招聘断念

2010年には、軍政の取り締まりがさらに強化され、選考時に元研修生が警察から取り調べを受ける事態が発生。当時の総主事代行にビザが発給されなくなってしまった。その後、2011年には全職員がビザ発給停止、急遽スタディツアーを中止したこともあった。同年、私はあるルートで単身ミャンマー入りしたが、研修生たちは恐怖を強く感じていて、研修生の招聘も当面休止することを決めた。ちなみに軍事政権が解散し、政権を移譲された新政府が発足したのは2011年3月31日であった。つまりビザ発給停止は民政移管後の出来事だった。そんな状況だったので研修生たちは新政府の進める民主化を全く信じていなかった。

民政移管、招聘再開、NLD政権誕生

節目が変わったことを知ったのは2012年8月だった。当時はＳＮＳどころか携帯電話もほぼ普及しておらず、訪問しなければ情報を得ることは困難であったが、現地を訪ねて驚いた。研修生たちが口々に「デモクラシー（民主主義）」と嬉々として語っている。この一年で、半信半疑だった民政移管が草の根にまで浸透したことが伺えた。特に今まで禁句であったアウンサンスーチーという言葉が溢れていたのも印象的だった。この時の研修生たちの高揚感はそれまでの閉塞感からすると驚きだった。それだけにそれを踏みにじった軍政への怒りがこみ上げてくる。

そして、一年前には恐怖心から休止を決めた選考も「もう大丈夫だ、私の村から呼んでくれ」という声が相次ぎ、結果三つの村で選考を行った。その時に選ばれたのがモーママさんだった。民主化の申し子という言葉がぴったりで、歯に衣着せぬ言動はそれまでのビルマ研修生にはなかったもので新時代の到来を感じたものだ。それまで当会では軍政の国名変更に反対し、ビルマと表記し続けてきたが、民主化の進展を後押しするためにもミャンマーと表記を変えた。

2016年4月1日、ついにスーチーさん率いる国民民主連盟（ＮＬＤ）政権が正式に発足した。その日、私はミャンマーにいたが、町全体がＮＬＤのシンボルカラーである赤で溢れ、勝ち取った民主主義を祝っていた。その際の人々の笑顔が忘れられない。ついに長いトンネルを抜けたのだ。しかしながら、2021年2月1日、危惧されていた軍事クーデターが起こってしまった。その絶望と怒りは表現しきれない。

NLD 新政権誕生を祝う人々（2016 年 4 月 1 日）

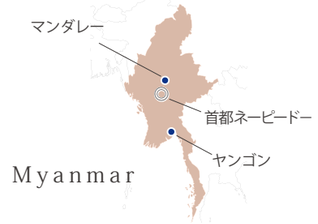
一縷の希望、草の根運動とCRPH

だが希望もある。Ｚ世代と言われる若い世代の運動だ。モーママさんも「村でも若い人ががんばっている」と言う。ＳＮＳを駆使して、ミャンマーの現状を世界に伝える。1988年の8888運動の際にも2007年のサフラン革命の際にもなかった動きだ。「日本から何もできなくて申し訳ない」と伝えると「ボスはキーボードファイターだ」と言ってくれた。意味は「インターネットで発信するという運動者」ということのようだ。日本でもできることはある。

他にもウェディングドレスで行進したり、事故車を並べて不服従運動（ＣＤＭ）を支援したりとしなやかで力強くユーモアもある。私のもとには「この現状を世界に伝えてくれ」という連絡が元研修生、知人から毎日来る。元々ビルマの運動は議会政治とは別に草の根で権利を主張し、形にしてきた。もう一度民主化を取り戻すために、ミャンマーの人たちは危険を顧みず行動を起こしている。草の根の運動、連帯を世界とつなぐことで一つ一つは小さな力でも大きな力になる。

出稿寸前にミャンマー連邦議会代表委員会（ＣＲＰＨ）が発足されたという情報が入ってきた。国軍に対抗するＮＬＤの議員らが立ち上げた独立組織だ。選挙に選ばれた議員たちによる正当性のある「臨時政府」を強く支持したい。ミャンマーの人たちは諦めずに歩みを進めている。

ぜひ皆さんの参加と応援、そして拡散をお願いしたい。心からのお願いだ。



新政権が発足した日の朝日

元研修生たちと田植え（2016 年 4 月 1 日）

PHD Movement

アウトリーチ型 在日外国人生活支援事業　第二章

濱　宏子 =文

夏からの活動 その後

北風が頬に冷たく当たり始めた11月、世間にはコロナ禍によるアルバイト雇い止めや給与激減などの悲しいニュースが渦巻き、その最前線に晒される留学生や技能実習生は水面下でその困窮の声を上げる事も出来ず苦しんでいた。私たちがアウトリーチ活動でひたすら歩き、かけ続けた声がやっと広がりを見せ始めたのがこの頃である。留学生ネットワークから口コミが拡がり、徐々に困窮者のＳＯＳが直接届くようになったのだ。ひたすら縦線で繋いでいたアウトリーチが 困窮者同士の横線へと繋がっていった。「ＰＨＤ協会で助けてもらえると聞いたのですが、私も助けていただけますか？」そんなメッセージが届くようになった。

浮き彫りにされてきた実態

勇気を持ってＳＯＳを発信してくれた留学生達を事務所に招き、話を聞いていく。来日の目的、現在困っている事、将来への希望など、先ずは話に耳を傾け、気持ちに寄り添っていく。どの留学生にも辛い背景や苦しい経済事情があるのだが、時折り見せる笑顔は優しい。

いくつか具体例を紹介すると、やはり大きいのは生活費の困窮である。ミャンマーの元留学生リンさんの場合2017年に希望に溢れ来日するが、日本語学校卒業後に専門学校の費用が払えず中退。その後、コロナ禍で仕事もなく、生活を故郷からの仕送りに頼る事になったのはいかに辛かっただろうと想像に容易い。切り詰めるのはやはり食費になる。こちらが提供した米や食料に顔を綻ばせ、狭い部屋の軒先に吊るされた大切な干柿をそっと私達に渡してくれる。噛み締めると彼の苦労の分、それは甘く感じられた。

リンさん宅にて

同じくミャンマーのナンミミさん、ピョーさん、ジャシンさん、ロンさん、アウンさんの5人グループが抱える問題も大きい。来日に際し日本の高額な授業料のための借金を背負っているのも辛い背景のひとつである。本来の来日時期は4月だったがコロナで遅れ、11月から学校に通い始めた。勉強しながら真夜中に過酷なアルバイトをして借金の返済費用までを賄う。希望に胸膨らませての日本の生活は次第に困窮していくこととなった。

食料支援活動にて見聞きした在日外国人の抱える課題

- アルバイトの解雇・雇い止め
- アルバイト先の工場が遠い（バスで 2 時間かかるなど）
- 安定した仕事が得られない
- 貯金がない
- 直近の食べ物に困る
- 高額な家賃・部屋の狭さ・風呂がない
- 本国からの仕送りがない
- 本国に仕送りができない
- 頼れる日本人の友達がいない
- 本国に残してきた家族に会えない
- 仕事先で出身国によって受ける扱いが違う

食材の説明を聞きながら
スーパーで買い物

支援実績（2021 年 3 月 15 日時点）

アウトリーチ訪問先　62 件
1. 相談件数　30 件（計 51 人に対応）
2. 食料・日用品配給
　延べ 64 人（うち中国 16 人、ミャンマー 40 人、ベトナム 2 人、
　バングラデシュ 1 人、インドネシア 3 人、ネパール 2 人）
3. 居住支援　計 5 人、（ベトナム 2 人、バングラデシュ 1 人、ネパール 2 人）

日本の食材で、母国の料理を
どのように作れるか、馴染み
のない食材の調理法を学ぶ

ミャンマーの代表料理モヒン
ガーを米粉麺で代用して作る

インガンさん（インドネシア）

姜（ジャン）さん（中国）

呉（ウー）さん（中国）

まだ顔に幼さが残る5人と待ち合わせ、食料品を購入すると「これでたくさん美味しいお料理が出来ます」と笑顔になる。冷蔵庫に食材をしまうまでを見届け、ほっと胸を撫で下ろす。

中国からの留学生 呉（ウー）さんの場合は、母親からの仕送りが高い授業料に消えてしまうので、コツコツとアルバイトをしていたが、コロナでアルバイトもなくなり、細々と時給1000円の英会話講師で食いつなぐ日々だった。貯金はゼロだと言う。支援したお米を部屋まで運ぶと、簡素な暮らしが想像できる。「お腹いっぱい食べて下さいね」と声をかける。日本を陰で支えてくれる働き手の外国人がこの状態ではいけない、悔しい思いを噛み締めながら帰路に着く。

更なる食料支援への取り組み

そして現在、40年間のＰＨＤ活動の証とも言うべく、数多くの支援者様や団体様から食料を支援して頂けるようになった。お米、野菜、乾物、お菓子、調味料など「是非困った方の為に使って下さい」と言っていただき頭が下がる。やはりＰＨＤ協会はこの支援者の皆様との関係なくしては成り立たない。先日は高校生までが自作のお米を抱えてきてくれた。こうして国や立場を超えた命のリレーは繋がっていく。ＰＨＤ創始者 岩村昇先生の教えに導かれ、弱き者に寄り添い、弱き者と共に生きる社会を目指し、明日も変わらず地道にひとりひとりと丁寧に向き合うだけである。

缶詰などの加工食材の説明を受ける
ナンミミさん（ミャンマー）

食料支援のための有機野菜をご提供いただく

2021年度研修生招聘について

⇒可能であれば新スタイルでの招聘を実現したい、が、、、

坂西卓郎＝文

144号（7月発行）でお伝えさせていただいたように2020年度において一年間の招聘延期を決断しました。約一年前は新型コロナウィルスがまだ正体不明で、そのような中での招聘は研修生、受け入れ側双方の安全を確保できないと判断したことが主な理由でした。

あれから一年が経ち、コロナ禍の全容が見えてきました。変異株という新しい脅威もありますが、人類は対応方法を学んできたと言えるでしょう。とは言え、医療体制の状況などを踏まえるとまだまだ手放しでは安心できない状況でもあります。

そこで、流動的な方針になりますが、2021年度は「招聘できるタイミングがあれば招聘する」とします。招聘には主に二つのハードルがあるかと考えています。

１．　入国規制の状況
２．　招聘受入を歓迎できる状況かどうか

１．については物理的な状況です。国境がオープンになっていなければ手はありません。振り返れば2020年度も10月1日から12月24日までは入国が可能な状況でした。2020年度はあえて見送りましたが、2021年度はそのようなタイミングが来れば招聘を検討します。

２．については判断が難しいところです。ただ研修生、そして受け入れる私たちの安全がある程度見込めることが前提になります。その上で、従来のように来日を歓迎できる状況かどうかも重要かと思っています。こちらに関しては感染状況やワクチンの状況なども影響する可能性があります。それらを含めて総合的に判断させていただくことになります。

この二つがクリアーされても従来の研修事業からは大きく変わることになるでしょう。感染症対策への重視が大前提となるので、当会の研修の柱であった草の根交流、具体的にはホームスティや研修旅行なども中止や大幅な縮小になるかと思います。期間も従来の一年ではなく短縮もあり得ます。

辛い決断ですが、前を向いて歩みを進めるしかありません。38期生の3人は来日を一年待ってくれていますが、その意欲や希望は衰えることがありません。新しいスタイルとはなりますが、なんとか二つのハードルを越えた上で受け入れを実現できればと思っています。まだまだ流動的な要素が多いです。特に「歓迎できるか状況かどうか」については皆さんのご意見をお寄せいただければ幸いです。

第38期 研修生
ブディさん（インドネシア）、アシカさん（ネパール）、トゥートゥーウェイさん（ミャンマー）

国内研修生制度2.0はじめます！

坂西卓郎＝文

海外からの研修生については、P13の通り流動的です。海外から招聘できない場合でも、当会の研修ノウハウを生かして、人材育成に貢献できないか考えました。そこで、試験的とはなりますが、2021年度は国内研修生制度2.0を開始したいと思います。

2.0とは元々はインターネット用語で、「ソフトウェアのバージョンアップ」のことを指します。現在は色々な分野で使われるようになり、ＮＰＯ2.0という表現もあります。では、国内研修生制度の何がバージョンアップするのか。それは対象者です。

当会の国内研修生制度は「国内」を大切にしてきました。日本人研修生ではなく、国内に住む方を広く対象にする、というものでした。そこには国籍に囚われるべきではない、という信念がありました。

しかしながら、現実には外国籍の方は居なかったように思います。そこで、2.0として、国内に居る外国籍の方を積極的に対象として、研修事業、共に生きる実践に取り組みたいと考えました。

実際の対象者は次号、7月号で報告させていただきますが、現在ミャンマーのカレン民族の方が2名、中国の方が1名候補となっています。まだ増えるかも知れません。

既に国内に居住している人が対象となりますが、「日本で学んだことを帰国後、地域に還元する」という目的は変わりません。候補者の方は次のように言いました。「カレンの人たちは国軍との内戦で大変です。帰国後、カレンの人たちのためにがんばりたい」。ミャンマーで軍事クーデターが起こる中、カレンの人を迎えることは草の根交流としても意義深いと感じます。

ただ海外研修生と違い、一年間の研修終了後すぐに帰国するのではなく、数年日本で働くことも想定されます。これは従来の国内研修生と同じで、結果をすぐに求めるのではなく、長期的な視点で成果を期待するものです。

新しい研修事業となりますが、従来と同じく皆様のご支援なくては成立しません。ご理解、そして今までと変わらぬご参加、ご支援をいただければ幸いです。

PHD News

2020年1月のヘルマさん、娘さんと一緒に

訃　報

ヘルマ=イェニさん逝去

2021年2月26日　享年36歳

(2007年度研修生・インドネシア出身)

癌による２年間の闘病でした。たくさんの支援で手術も受けましたが祈りも虚しく旅立ちました。

ご冥福をお祈り致します。PHD協会はいつもヘルマさんの魂と共にあります。

Kami turut berduka cita atas meninggalnya ibu Helma Yeni. semoga Helma memperoleh tempat yang mulia di sisi Tuhan.

Kami PHD selalu dengan jiwa Helma., amin.

With Myanmar基金
「寄り添いの想いをカタチに」第一次募集

民主化を目指すミャンマーの研修生に寄り添うために基金を設立します。本基金の主な目的は副題の通り、「ミャンマーへの寄り添いの想いをカタチにしたい」に尽きます。基金を通して、連日、民主化運動に奮闘する研修生への連帯を示します。

ＰＨＤ協会では、軍による弾圧が強まる中、研修生たちが非常に緊迫した状況にあると判断し、3月中旬に最初の支援金を送りました。今後は現地の状況に応じて送金したいと考えています。

現在、基金の使い方としては、不服従運動（ＣＤＭ）参加者の給与補填やデモのための諸費用（バナー作成、ガソリン代、食費、マスク等衛生用品）を想定していますが、状況が流動的であるため詳細はまだ確定していません。研修生が拘束された場合は弁護士費用に充てることになるかもしれません。最新情報では、村にいつ軍隊が来るかわからないので、25人ずつで４つのチームを作り、夜通しの警備をしているそうです。そのため、村を守るためのバリケードを築きたいという話もあります。また、今や外部との連絡や情報拡散の重要なツールであるインターネットも満足に繋がらず、不安が極まっています。衛星電波など他の手段が必要になるかもしれません。皆様からのご寄付は、今後の現地の状況に応じて、研修生たちに活用してもらいます。

次回の会報（7月号）では、基金の使い方をより明確にし、第二次募集を行う予定です。「応援したい気持ちはあるけど、この内容では不安」という方は、次回の会報までお待ちいただければと思います。前述のとおり、本基金の主旨は「寄り添い」です。よってご寄付は少額で結構です。ご寄付をくださった方のお名前、メッセージとともに研修生たちに届けたいと思います。ぜひご協力ください。

「ミャンマー基金」とご明記ください。

ゆうちょ銀行
口座番号：01110-6-29688
口座名：公益財団法人ＰＨＤ協会

WithMyanmar基金
専用オンライン決済ページ
https://phd-kobe.secure.force.com/?at=p&dt=1&uid=a015h00000EhjQRAAZ&f=1

○月×日の PHD 協会

山本　毎朝、出勤時に必ずゴムの木に水やり。前任者八木から引き継いだ重要業務。ゴムの木が調子を落とすと山本も体調不良に。共に生きる実践ここでも。

中村　必殺仕事人中村。タスクを時間内で確実にこなす日常。が、ある在宅日に大事な案件で不備発生。子どもの迎えと修正処理〆切が同じ時間に。一瞬焦るが、やはりなんなく乗り切る仕事人。

濱　みんなのいえ施設長に就任。目下の課題は片付け苦手な入居者。怒鳴りたくない、怒鳴りたい。共に生きる社会への道のりは遠い？

古寺　熟練会計担当者としてＰＨＤの財政を取り仕切る。だが、ある日現金が合わずに焦り、反省。弘法も筆の誤り？初心忘れずにと謙虚な古寺。

坂西　2月1日42歳に。記念日にミャンマーで軍事クーデター勃発。こんな悲しい誕生日は初。仕事に手が付かず、頭痛に襲われる。

中島　微妙な暑さ寒さの時、冷暖房をつけるのか否か。そして誰がスイッチを押すのか。我々は我慢比べをしているのだろうか。押す人は敗者なのか、勇者なのか。

以上、上から7,9,12,19,20,24の順（ヵ国）

PHD LETTER 146号

発　　行：公益財団法人ＰＨＤ協会
住　　所：〒653-0836　神戸市長田区神楽町3-7-4
電　　話：078-414-7750
ＦＡＸ：078-414-7611
E-mail：info@phd-kobe.org
URL：http://www.phd-kobe.org
郵便振替口座：公益財団法人ＰＨＤ協会 01110-6-29688

お知らせ

40周年記念式典は
11月27日（土）に決まりました！